

被災地派遣レポート〈第6回〉

環境局多摩環境事務所 下河原 孝さん

石巻市に対する支援業務初日の夜、被災した市の中心部が見渡せる日和山公園で一人の老人にあった。長靴履きの60代くらいの男性である。

電灯がまばらに灯る市街地を見ている私のすぐ横でじっと両手を合わせていた。しばらくすると、少し離れたところで、闇に包まれ風の音しか聞こえない全壊した海岸部に向けてまた両手を合わせていた。

気になって、話しかけてみた。「毎日、来ているんですか。」「地震の日からだよ。」と。親しみを感じた。それから15分ほど、自分の娘や孫の安否のこと、いつもと異なる避難路を選択して亡くなった小学生、幼稚園児たちのことなど、涙ながらに語ってくれた。

「今は電気がついてるけど、地震があっってからしばらくは真っ暗なままだった。寒いし食料も無かった。ヘリは飛び回るけど、何も来ねんだ。そのときはもう絶望だけで、生きていく気力もなかったな。灯りがちょっとずつ増えてくると、希望が湧いてきて、みんな少しずつ前向きようになったんだ。」。寒空の下、その言葉が目の前の景色と重なり心に重く響いた。

「東京都から市の支援で来ました。宮古に実家があるんですけど、津波で半壊です。両親は無事だけど親戚の一人が今も行方不明です。」という、自分の事のように心配してくれた。その心使いが暖かく、懐かしささえ感じて涙が溢れた。

その日以降、毎夜公園で犠牲者の冥福を祈った。

市の職員に案内された遺体安置所で一人の女性を見た。20代後半であろうか。駐車場から受付に歩いてくる女性は、泣きはらしていた。その光景につらくなり、私は下を向いた。女性は遺体確認のため、警察官に促され一緒に安置所に入っていった。捜し続けていた人にやっと会えたのだろう。棺に覆いかぶさり泣いていた。私は、「見つかってよかった。これで家族のもとに帰れる。」という思いが込み上げ、悲しさの中にも一種の安堵感を感じていた。

人事院から派遣され受付を担当する職員は、憔悴しきっていて目も赤かった。警察官も無言で淡々と職務をこなしているものの、疲労の色の濃いことは誰の目にも明らかだった。4月に採用されたばかりの市の新人職員は採用直後から受付を担当していた。現実に向き合い、背負うものの重さを受け止めている姿は今も忘れない。

辛く悲しい現場で長期間にわたり職務に携わる関係者の方々の姿に感謝の言葉以外見つからなかった。私は、駐車場の車の中で悲しみにくれる女性を気にかけてながらも遺体安置所を後にした。

宿舎となった老人福祉センター寿楽荘で夕食後、センターの男性職員と話した。薄暗い1階のロビーで一人日誌を書いていたところ、何も言わずそっと明かりをつけてくれた。口下手だが、物静かで優しさを感じさせる人の最高の気配りであった。

聞くと家族が今も行方不明である。震災後しばらくの間、職務に追われ、家に帰ることも、

家族を探すことも出来なかったという。自衛隊や警察、消防に感謝しつつも、やはり自分で探し出したいとの思いを打ち明けられた。

罹災証明書発行のために現地調査を共にした市職員にも、津波で家を流されたり家族を失った人が多い。その方々も震災後、胸まで水に浸かり、遺体が横たわる瓦礫の山の中を食料を抱えて避難所に届けるなど、自らの家族・生活を後回しにして懸命に使命を果たしてきたことを現場への移動中の車内や昼食時に語ってくれた。

その一方で職員の必死な活動は、住民に必ずしも理解されていない。東京のニュース番組では、自治体職員の疲弊が問題となっているが、現場の状況は一向に改善されず疲労し切っていた。人前では、皆明るく振舞ってはいるものの、調査先での市民の無理な要求に対して逆に怒り詰め寄るなど、心が折れかけている職員もいた。

だからであろう。市職員の言葉、表情の中に私たちは必死に活動をしてきたことを聞いて欲しい、少しでも感じ取って欲しい、という切なる願いを感じた。同郷出身の自治体職員として、少しでも支えてやりたい。この思いが強くなった。

都に依頼された職務を通じて市を支援することは、被災地の復旧復興への一助になることは理解していた。ただそれ以上に、被災地の出身の一職員としてできること、それは悲しみを少しでも分け合い、また被災者を少しでも勇気づけることであると心に決め市民に接してきた。

その一方で、東京で生活しているうちに、いつの間にか自分が忘れてしまったものを気づかされた。「人の温かさ」だ。TVで流されているものではない。人々を助けるために犠牲になった警察官や消防関係者、水産物加工会社の方々、不眠不休で活動している市職員、日本全国からの応援部隊、ボランティアによる献身的な活動など、「誰かのために」「自分が出来ることは何か」を真剣に考え、行動している人々が、そこには大勢いた。

有名芸能人による炊き出しもマスコミの目を引いていたが、夜には下積みの無名の俳優志望者や事務所スタッフなど決して表に出ることのない人々が次の日の準備のために遅くまで献身的に働いていた。その姿に言葉など要らなかった。